

箱根駅伝と新聞

HAKONE ekiden and press

1K04A0016-2

泉 沙織

指導教員

主査 寒川恒夫先生

副査 杉山千鶴先生

序章

駅伝発祥の地といわれ、駅伝が大好きなお国柄である日本において、現在最も人気のある駅伝が箱根駅伝だといえる。関東の大学駅伝というローカルな駅伝だが、長い歴史を持ち、テレビ中継までされているこの駅伝の魅力は、メディアによって引き出されている部分も多い。その中でも今回はラジオもテレビもない創設時から箱根駅伝を報道してきた新聞にスポットを当てる。箱根駅伝創設に大きく貢献した報知新聞(現在のスポーツ報知)と、報知新聞の後を引き継ぎ、箱根駅伝をここまでのビッグイベントにした読売新聞を取り上げて、箱根駅伝との関わりを調べていく。

第1章

第1章の1では、創設者である金栗四三が箱根駅伝を創設するに至った経緯から、箱根駅伝を具体化し実際に開催されるまでの奮闘、戦時中の箱根駅伝の様子、終戦後の復活、復興後のモータリゼーションが進む中で箱根駅伝を行うにあたっての問題、シード校制度や繰上げスタートを行うようになった理由、ラジオ、テレビの参入、留学生問題など現在に至るまでの変革を5つのセクションに分けて説明している。また2では、歴史の総括として、大正、昭和、平成と90年近くの長い間、人々を魅了し、危機を迎えながらも生きながらえてきた箱根駅伝について、関東学生陸上競技連盟の動きとメディアの台頭によって変化していく箱根駅伝にスポットを当てて考えている。

第2章

箱根駅伝における新聞社の関与について調べている。報知新聞社は箱根駅伝の創設にも尽力し、開催されるようになってからも主催として、資金面、運営面の両面でこの駅伝を支えてきた。その力は絶大で、関東学生陸上競技連盟は報知新聞社の補助的な役割を担っていたようだ。その報知新聞社が昭和16年に読売新聞社に吸収されると、箱根駅伝の業務も読売新聞に引き継がれることとなった。読売新聞は戦後

の復活第1回大会の開催の時に本格的に参入し、大会開催に大きく貢献している。読売新聞社はこの後も、箱根駅伝の後援として、その知名度と規模の大きさを生かした広報活動と報道を展開。この駅伝を新春のビッグイベントに仕立て上げた。特にテレビの放送が始まった昭和62年からは、関連会社にあたる日本テレビと強力なタッグを組み、ますます箱根駅伝に力を入れている。この読売新聞社の多大なるバックアップは、この箱根駅伝がここまでの人気を博すためには不可欠な要素であったといえる。長い間、箱根駅伝の後援であった読売新聞社は平成16年から関東学生陸上競技連盟との共催で箱根駅伝の運営にも携わるようになっていく。

第3章

第1回大会から読売新聞がどのように箱根駅伝について報道しているのかを10年ごとに分析し、変化を見ていく。大正時代の箱根駅伝の記事では、当時はまだ報知新聞社が主催だったこともあり、大会が開催されたことがわかるだけの簡単な報告記事となっている。記録は記載されているがレースの詳しい内容はまったくわからない。それが、戦後、自社が主催、後援になると報道も一変。宣伝での箱根駅伝の露出もさることながら、結果の記事でも写真や成績表を掲載し、見やすく分かりやすい記事になっている。その後の現在に至るまで時代ごとに改良が加えられ、現在では写真や見出しが大きくインパクトのある記事になっている。

終章

テレビ中継が箱根駅伝に参入してから20年。テレビの過熱報道に対応して、新聞が扱う箱根駅伝もインパクトのある内容になっている。大正時代の創設から箱根駅伝をどこよりも長く報道してきたという新聞社の特性を生かし、テレビでは伝えられない箱根駅伝の魅力に迫ってほしい。それが、新聞とともに進化してきた箱根駅伝を報道によって支えることになる。